

# 歴史的建造物を活用した観光交流の仕組みの可能性とその意義

——北前船における関連歴史的建造物を事例として——

## Possibility and Significance of Structure of the Sightseeing Interchange that Utilized Landmark Architecture

菊地達夫

KIKUCHI Tatsuo

### 【論文要旨】

本稿は、持続発展的な観光交流について、戦略的な仕組みを示すことができないか、検討を行うものである。具体的には、点在する歴史的建造物を結びつける観光交流の仕組みについて、北前船の寄港地を事例としながら、可能性と意義について明らかにしようとするものである。

その結果、関西地域、北陸地域、北海道地域の関連歴史的建造物は、商人の関係施設、船主の関係施設、漁家の関係施設といった特色に分けることができた。いずれも、経済的利益の痕跡を残すものであり、その富みを生み出した仕組みについての情報を盛り込むことで、他地域への観光意欲につながる可能性を示唆した。また、「現代版北前船ツアー」のあり方は、持続発展的な観光交流を目指す上で、参考になることを確認できた。

キーワード：観光交流・観光情報・北前船・関連歴史的建造物

### I はじめに

現在、歴史的建造物を活用した観光活動の取り組みは、国内外で盛んである。その手法は、歴史的建造物自体を観光資源化する方法、歴史的建造物の中身を観光活用する方法、その双方を目指すものが考えられる。これらが集積しているところは、伝統的建造物群という形態で一定の地理的範囲を観光資源化するような場合もある。また、有力な歴史的建造物がある場合、それを中核とした観光活用を模索するようなことも生じる。

いずれの形態でも、歴史的建造物またはその周辺を含む範囲で観光資源化していこうとする共通性がある。よって、それらの地理的範囲を超えた他地域との結び付きを模索するような動きは少ない。このような連携は、いわば観光客を誘因する上で競合するため、積極的に協力関係を築こうとする姿勢にはならない。ただ、周辺に類似するような歴史的建造物群がある場合、観光リーフレットを通じて双方を紹介するような動きはある。しかしながら、持続発展的な観光交流を目指す上で、一度の観光旅行に焦点を充てるだけでは、いずれ先細りとなる。

そこで、日本各地さらには海外を含め、観光客の相互交流を促すような仕組みに注目したい。その仕組みのポイントは、同一主題の共有である。訪問観光客には、主題を通じた何らかの関連性を示唆することで、次の観光意欲につなげてもらう。これまで、このような観光意欲は、個人の知識量・気付きに大きく委ねられていた。

本稿では、持続発展的な観光交流について、戦略的な仕組みを示すことができないか、検討

を行うものである。具体的には、点在する歴史的建造物を結びつける観光交流の仕組みについて、北前船の寄港地を事例としながら、可能性と意義について明らかとする。

北前船は、江戸期、明治期を中心に、交易の主力交通機関として日本各地に寄港した。寄港地では、港湾施設、倉庫、商業施設などの建造物が立ち、交易の発展を支えた。そのため、他地域に点在する歴史的建造物は、いずれも北前船という主題を通じた関連性があり、本稿で取り上げる事例として適切と考えた。

まず、観光交流の仕組みの必要性について、これまでの課題を浮き彫りとしながら述べる。次に、北前船の関連歴史的建造物について、いくつかの事例地を取り上げ、どのような特色があるのか、明らかとする。それをふまえ、関連歴史的建造物を結びつける観光情報のあり方を示し、先駆的な取り組み事例の様子にも触れておきたい。最後に、観光交流の仕組みについての意義をまとめながら、どのようなことが課題として残るか、示したい。

## II 新しい観光交流の仕組みの必要性

### 1 従来の観光交流の特色と課題

従来の観光交流は、居住地と観光地（観光資源）を結び、出来る限り、観光地に滞在させることで経済的効果を期待するものが中心であった。

とりわけ、宿泊施設の場合、いかに宿泊客を施設外に出さず、施設内に留まらせるか、を重要としていた。温泉旅館・ホテルでは、夕食はもちろん、娯楽施設、休息施設を施設内または敷地内に充実することで、宿泊客の期待に応えることを目指した。それゆえ、近隣の旅館・ホテルの温泉を巡るような発想は、暫く生じなかった。また、周辺の観光資源を積極的に紹介するような姿勢も弱かった。すなわち、他の温泉旅館・ホテル、他の温泉地、他の観光資源に観光客の目を向かなくすることで、そこでの支出を高め、リピーター需要にも結びつけようとした。

このような温泉地では、近代的なホテルが林立するものの、徐々に温泉街は寂れ、人通りの少ない光景に陥った。やがて、宿泊施設も、宿泊客の足が途絶え、地域全体が停滞するような事例がみられるようになった。結果として、単独の利益向上を目指す構造が、地域全体を疲弊させることにつながった。

それ以降、いくつかの観光地（温泉地）では、地域全体としての観光情報を共有する新しいシステムを取り入れ、域外から注目を集めたところがある。そのポイントは、観光客を「動かす」仕組みを築いたことにある。代表的な地域として、九州の黒川温泉を挙げることができる。

### 2 持続発展型の観光交流の仕組みの必要性

すでに述べたように、いくつかの観光地では、観光交流を目指した観光情報の発信を行う動きはみられる。

ここで示す持続発展型の観光交流の仕組みは、その観光交流を日本全域または海外までに拡大させようとするものであること、加えて、観光客が、現地で観光情報を得て、より一層の観光意欲を高められるものであること、を想定する。とりわけ、後者は、一度の観光旅行の中に付加価値をつけようとするものではなく、次の観光旅行に活かしてもらうものである。

次に活かす観光旅行は、必然的に過去の観光旅行とのつながりを深化させる。

その観光意欲を高めるためには、現地における効果的な観光情報の発信を必要とする。現地の観光情報は、他地域の関連ある観光資源まで想定しているものは少ない。

他方、Web サイト、旅行雑誌、テレビ番組など、現地を訪問するまでに多くの情報を事前収集することが可能になった。そのため、現地の観光情報は、より一層の差別化を目指すことが求められる。

これまでは、差別化の一つの方向性として、詳細な観光情報の提供を目指すことが多かった。この手法は、一定の効果はある。ただ、詳細な観光情報には、他地域との結び付きを含むこともあるが、それを中心に編集しているわけではない。

このような事情から、現地の観光情報として、他地域との関連がわかる内容の充実を強調したい。その手法は、地図、地名を活用しながら、何が結び付いているのか、示すことを大切とする。その結び付きは、人又は物（資源）を想定できる。

もう一つ重要なことは、関連ある地域間で、その情報共有の意義を理解できていることである。例えば、A 地域と B 地域が、関連あるとすれば、A 地域からの発信のみでは、A 地域から B 地域への観光意欲を高めることはできるが、B 地域から A 地域へのそれはあまり期待できない。観光交流を高めるには、関連地のどこを訪れても、他地域との結び付きがわかることが重要となる。

次章以降では、北前船の寄港地における関連歴史的建造物を事例として、述べる。

### Ⅲ 北前船における関連歴史的建造物の分布と特色

すでに述べたように、北前船の活躍した時期は、江戸時代から明治時代にかけてである。寄港地は、約 90 前後の数があるとされている（第 1 表）。

本章では、主な地域に残る歴史的建造物（博物館資料）、人物、物資について、述べる。北前船は、主として北海道と大阪を結ぶ航路であった。寄港地は、北海道から山陰地域にかけての日本海岸、瀬戸内海岸に分布している。ここでは、関西地域、北陸地域、北海道地域の 3 地域を取り上げる。

#### 1 関西地域

まず、関西地域は、北前船を育てた商人の出身地（居住地）に歴史的建造物が残る。とりわけ、彦根市や近江八幡市には、神社、商人家、土蔵などがある。具体的には、藤野家、伊藤家、西川家などの家屋・屋敷があり、いずれも北海道（蝦夷地）へ渡った重要な人物であった。中でも伊藤家は、後の伊藤忠商事、商社丸紅となった創始者でもある。

大阪市は、北前船の起点となった場所であり、関連の歴史的建造物も多い。代表的なものは、住吉大社であり、各地の住吉神社も関連の建造物である（例 小樽市の住吉神社）。また、天保山も、北前船に関連している。天保山は、日本一標高の低い山（4.35 m）として有名であるが、河川工事によって川底の土砂を積み上げたものである。河川工事は、船舶（北前船）の安全な航行を確保するものであった。

神戸市は、函館市に造船所などを立地した高田屋嘉兵衛の出身地である。函館市では、高田屋嘉兵衛に関する情報発信が多く、その知名度は神戸市を上回る。他方、神戸市及び周辺地で

第1表 北前船の主な寄港地

北海道	小樽	東北	川内	上信越	岩船	北陸	黒島	山陰	橋津	瀬戸内海	上関
	余市		大畑		荒川		福浦		赤碓		竹原
	寿都		田名部		新潟		金沢		西郷		御手洗
	熊石		野辺地		寺泊		本吉		美保関		椋浦
	江差		青森		出雲崎		橋立		境港		尾道
	松前		十三湊		小木		三国		鷺浦		玉島
	函館		鱒ヶ沢		宿根木		河野		宇龍		下津井
	室蘭		深浦		柏崎		敦賀		温泉津		多度津
	苫小牧		能代		熊生		小浜		浜田		日比
	門別		戸賀		糸魚川		舞鶴		須佐		牛窓
	様似		土崎		水橋		宮津		萩		坂越
	釧路		本荘		東岩瀬		久美浜		角島		室津
	厚岸		金浦		新湊		竹野		室津		神戸
	根室		酒田		伏木		柴山		下関		都志
	東北		大間		加茂		小木		香住		三田尻
佐井		飛鳥	輪島	浜坂	室積	大阪					

資料) 加藤貞仁 (2002) : 『北前船 - 寄港地と交易の物語』 無明舎出版.

は数多くの関連博物館資料が、いくつかの博物館（神戸海洋博物館・赤穂市立民俗資料館）で展示されている。

## 2 北陸地域

北陸地域は、加賀市と能登半島について述べる。加賀市の寄港地は、瀬越と橋立の2カ所ある。両地域には、北前船の船主が多く住み、一時は日本一の富豪村とも呼ばれた。北海道の小樽市にある倉庫は、何人かの船主が建設したものである。その代表的な人物は、大屋であった。

そのような事情から北前船に対する思い入れが深く、橋立には、「北前船の里資料館」が位置する。北前船の博物館資料は、自治体博物館の一資料として展示される場合が多く、専門博物館の立地は博物館資料の量や価値に起因する。その他にも、神社（鳥居）、船主の家屋・屋敷、庭園などが分布する。

能登半島には、10か所以上の寄港地が分布する。また、内陸に位置する門前町には、数多くの北前船の関連資料が残っている（天領北前船資料館）。中でも、船絵馬は、94枚この地（門前町）で確認されている。さらに、半島の各地では、灯台、墓地、井戸など他地域ではみられない歴史的建造物もある。

## 3 北海道地域

最後に、北海道地域では、松前町、江差町、余市町、小樽市について述べる。これら4地域に共通するものは、ニシンである。よって、歴史的建造物は、漁家、漁業施設が中心となる。

松前町は、先に述べた近江八幡市の商人が、北海道（蝦夷地）へ渡った地でもある。そのような事情もあり、松前町と近江八幡市は姉妹都市になっている。江差町では、北海道（蝦夷地）で生産できないものが、いくつか博物館資料として残されている。中でも、陶磁器や佐渡

わらじといったものは、歴史的建造物内（旧関川別荘・旧中村家住宅）に展示されている。

余市町では、ニシンの加工場を復元した「旧余市福原漁場」がある。ここでは、ニシンの加工技術の紹介、道具などが展示されている。小樽市では、先に述べた北陸地域の船主の倉庫、山形県出身の青山家の別邸などが分布する。

以上、3地域を取り上げたが、関連歴史的建造物の地域的特色を浮き彫りにできた。関西地域では、商人の関係施設、北陸地域では、船主の関係施設、北海道地域（蝦夷地）では、漁家の関係施設に大別できる。加えて、北海道地域（蝦夷地）の関係施設は、関西地域、北陸地域の商人、船主に深く関係している。

すなわち、3地域は、単なる北前船の関連歴史的建造物の残る地域というだけでなく、地域間の結び付きを具体的に確認できる。よって、持続発展型の観光交流を推進できる恰好の適地と判断できる。

#### IV 観光交流の仕組みの可能性

本章では、前章における関連歴史的建造物の地域的特色をふまえ、どのような観光情報を盛り込むべきか、示したい。続いて、先駆的な事例として、「北前船」を主題としたツアー旅行の様子を紹介する。

##### 1 関西・北陸・北海道の観光交流

3地域における北前船の関連歴史的建造物に共通することは、経済的利益の痕跡である。商人、船主、漁家の所有物として、大きな屋敷があったり、別荘（別邸）があったり、近代的な建造物があったりと富裕にあった事実を伝えている。また、北海道に残る関連歴史的建造物の場合、所有者が、道外地域（関西地域・北陸地域）出身者であることが少なくない。この点は、地域間の結び付きに気付かせる重要な事項となる。以下では、3地域における観光情報として、どのような内容を盛り込むと観光交流を後押しできるか、簡単に示したい。

関西地域の場合、北海道地域で活躍した商人の家屋が、関連歴史的建造物として分布する。観光情報として、商人らに富みをもたらした仕組みを示す必要性がある。具体的には、北海道での商業活動の内容、その有効性を伝えた北前船の役割について触れる。とりわけ、通信手段が発達していない時期において、交通機関は、単なる物資を運搬したのみではなく、地域情報を伝える重要な役割を果たしていた。

北陸地域の場合、北前船における船主が、関連歴史的建造物として分布する。観光情報として、船の所有者である船主に、なぜ富みをもたらしたのか示す必要性がある。具体的には、商品価格の地域間格差を利用した購買、その財の利益によって建築した北海道の倉庫群などについて触れる。とりわけ、商品価格の地域間格差は、通信手段の未発達によって生じた恩恵が大きい。

北海道地域の場合、漁家が、関連歴史的建造物として分布する。観光情報として、主要な産物であったニシンが、なぜ富みをもたらしたのか示す必要性がある。具体的には、ニシンの加工品が、高い需要をもたらした商品であることについて触れる。とりわけ、ニシン糟（加工品）は、道外地域において貴重な資源として重宝された。

以上の内容は、観光情報として、すでに組み込まれているところもある。例えば、北海道地

域のニシンに関する内容は、各種博物館で詳細に説明しているところもある。

他方、この手の観光情報が、関連歴史的建造物の点在する地域で共通認識にあるかどうかは、疑問が残る。神戸市の場合、高田屋嘉兵衛以外に豊富な観光資源を有する。ゆえに、地域全体の観光情報（例 リーフレット）として、何を盛り込むか考えると、優先する内容にはなっていない。

## 2 先駆的な取り組み事例

ここでは、2010年6月に実施された「現代版北前船ツアー」の様子について述べる。本企画は、関西地域出身の北前船の船主であった子孫によって発案された<sup>1)</sup>。その後、小樽市の観光協会らによって実行委員会を組織し、具体的な内容を企画した<sup>2)</sup>。

その内容は、新日本海フェリーが定期航路を結ぶ小樽～舞鶴間を利用しながら、小樽から舞鶴を経て京都までを巡る4泊5日の旅程（6月2～6日間 帰路は航空便）である（第2表）。船上では、北前船に関する講演やニシンそば（小樽群来そば）の昼食、舞鶴から京都までは、北前船のゆかりの土地を巡るものであり、随所に北前船が運んだ食文化の体験もできる。北前船のゆかりの土地では、船主や商人の屋敷、博物館資料の見学、寄港地（港）の見学などを行った。

本企画は、小樽から京都までの旅程を「北前船」という一つの主題でつなぎ合わせたことに特色がある。出港地の小樽、中継地の舞鶴、往路の終点地の京都、また主要な交通手段となった航路・船舶までも観光資源として位置付けた。すなわち、物語的な高度な観光旅行の仕組みを演出した。

第2表 現代版北前船ツアーの日程と主な内容

期日	内 容	場 所
6月2日	レセプションパーティー 小樽港を出港	オーセントホテル小樽 新日本海フェリー
6月3日	北前船の講演 小樽群来そば（昼食） 朗読劇と演奏 傑作北前船旬会 北前船の特別メニュー（夕食） 舞鶴港に到着 宿泊	船上 船上 船上 船上 船上 舞鶴市 宮津温泉
6月4日	天橋立の見学 旧三上家住宅（回船業） 北前船寄港地 北前船船主の家屋 近江商人の街並み見学 宿泊	宮津市 宮津市 舞鶴市（丹後神碕） 小浜市 近江八幡市 京都市
6月5日	東福寺の見学 コンサート鑑賞 チーズワインパーティー 宿泊	京都市 京都市 京都市 京都市
6月6日	帰路（航空便）	

資料) 現代版北前船プロジェクト Web サイト.  
<http://kitamaebune.com/page-id=31>.

第3表 第2弾現代版北前船ツアーの日程と主な内容  
 「北前船の歴史見聞録～松前・江差・函館へ～交易と軌跡の旅物語 秋編 2泊3日」

期日	内 容	場 所
10月22日	札幌発～函館着（団体列車）	
	入船番屋（昼食）	函館市
	箱館五稜郭・函館奉行所見学	同
	香雪園見学	同
	湯ノ川温泉宿泊	同
10月23日	いにしえ街道散策	江差町
	姥神大神宮見学	同
	横山家・山車会館・追分会館見学	同
	勝山館跡・ガイダンス施設見学	上ノ国町
	北前船講演会とコンサート	松前町（道の駅北前船松前）
	松前町旅館宿泊	松前町
10月24日	公園寺町めぐりと松前城見学	同
	松前藩屋敷見学	同
	木古内発～札幌着（団体列車）	

資料）現代版北前船プロジェクト実行委員会リーレット。

注）大人2名1室の場合49800円。JR以外はバス移動。

また、主催者の一人は、今後、本州の港発で本州の人に北海道を訪れてもらうなど、寄港地との経済交流を視野に入れ継続したいとの考えを示した<sup>3)</sup>。こうした考えは、筆者の推進する観光交流と重なる。よって、「現代版北前船ツアー」は、先駆的な事例として示唆に富む。

なお、第2弾（第3表）として、道南地域（函館・松前・江差）を巡る内容として、10月22日～24日の行程（列車・バス利用）約5万円で募集（定員25名）をした<sup>4)</sup>。

## V おわりに

本稿では、持続発展型の観光交流の仕組みを目指すにあたり、歴史的建造物の観光活用を事例に、その可能性と意義について述べてきた。事例として、北前船の関連歴史的建造物を取り上げ、関西地域、北陸地域、北海道地域の特色を確認し、有効な観光情報について指摘した。

関西地域を訪れた観光客を例にすると、北前船の船主の活躍についての興味・関心（北陸地域）、北海道に渡った商人の活躍についての興味・関心（北海道地域）につながる可能性がある。

観光旅行を計画する場合、地域の選定に先立ち、観光資源の選定によって地域の決まることが少なくない。観光旅行中に、他地域への観光資源の興味・関心が高まれば、次の観光旅行にもつながりやすい。歴史的建造物の場合、他地域での知見が、過去に訪れた歴史的建造物の意味や疑問点について、新たな発見を生むようなことも考えられる。単純な比較だけではなく、過去の観光旅行に活かすことができれば、その観光旅行の価値も高まろう。他地域とのつながりがもたらす醍醐味がわかれば、持続性も期待できる。

このような主題に富む観光旅行が脚光を浴びれば、必然的に観光交流がすすみ、観光地における観光情報のあり方に変化が生じるかもしれない。

最後に課題を指摘しておきたい。歴史的建造物の場合、日本各地に分布することは周知のとおりである。課題は、歴史的建造物の有する価値によって、観光情報の発信が異なることであ

る。また、その他に有力な観光資源をもつ場合、観光情報の量が限られやすい。ゆえに、関連歴史的建造物をもつ地域での共通理解が、どの程度できるかによって、観光交流のあり方は変わってくる。

その他に、交通機関が、コーディネートする手法がある。すでに述べた「現代版北前船ツアー」は小樽を出発地として、京都へ行く旅程であった。フェリー会社が企画すれば、京都・舞鶴を出発地として北海道（小樽市）へ行く旅程も成り立つ。

今回の主題は、「北前船」であったので、他の航路でも可能性があるし、特別企画で寄港地を巡るような内容もできるであろう。

すなわち、交通機関は、観光地とは異なり、観光情報を調整しやすく、主題の設定も比較的容易である。また、往路、復路といった観光交流の形態にも都合がよい。

本稿では、持続発展型の観光交流について、その可能性と意義を指摘するのみに留まった。今後は、具体的な現地調査を行い、より有効性ある情報を提言していきたい。

#### 注

- 1) 北海道新聞夕刊 2010年1月4日 11頁記事.
- 2) 現代版北前船プロジェクト Web サイト.  
<http://kitamaebune.com/page-id=31>.
- 3) 北海道新聞朝刊 2010年6月9日 32頁記事.
- 4) 北海道新聞朝刊 2010年9月29日 27頁記事.

#### 文献

- 鑑啓記（2002）：『北前船おっかけ旅日記』無明舎出版.  
加藤貞仁（2002）：『北前船－寄港地と交易の物語』無明舎出版.